

家庭科教育法における製作活動の教育的意義

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: NISHIDA, Junko メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4067

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



家庭科教育法における製作活動の教育的意義

児童学部 児童学科 非常勤講師
西田 順子 Junko NISHIDA

要旨：生活は総合的なものであり、家庭科の学習領域は広範囲にわたる。家族・保育・福祉領域、衣食住の生活領域、消費・経済・環境領域などさまざまな学習をする。それぞれの分野で題材ごとに、講義形式だけでなく参加型の授業を展開していくためには体験学習が最も効果的であると考え、これまで各領域で取り組んできた。

しかし、中・高家庭科の履修時間数の削減から、実習時間も制限され、被服実習では簡単な小物作りしか出来ないという学校も多い。学生の小中高等学校での家庭科の学習内容の実態を調査し実習活動の基礎資料とした。また学生の食生活について、家族との共食頻度や団らんの時間などをアンケート調査し、家庭生活に生かせる教材選択の参考資料とした。調理実習よりも、被服実習は苦手意識がある学生が多いが、創意工夫を凝らした図案の作成や布地の色選びなど、基礎縫いの練習から完成時には技能の習得度を高めることが出来た。また布地の色彩が食欲に与える効果なども検証できた。製作活動から得られる教育的効果は高く、製作経験によって得られる達成感や、自力で完成させたという自信や感動を味わい、製作の楽しさを味わうことは大切なことである。また学習指導案を作成し、模擬授業の実践をしたが教員養成課程での模擬授業の教育的効果は高いものがある。家庭科教育によって得られた知識や技能が実生活に生かされ、より良い家庭生活や家族関係を築けるような人材を育成すること、そして指導者として家庭科教育を担当できる力をつけることを目的とする。家庭科教育法において取り組んできたさまざまな実践例や指導方法、模擬授業の実践例について、これまでの実践報告をする。

キーワード：被服製作、製作活動、達成感、家庭科教育、模擬授業

1、はじめに

戦後の日本経済の急速な発展とともに、私たちの生活も日を追って変化している。その生活様式の変化が、家庭生活その他さまざまなところに影響をもたらしている。家事労働の社会化が進み、手作りが減り、中食が増えた。コンビニやデパート、量販店、ネットショッピングなど、お金さえあれば何でも買える時代である。ミシンが家に無く、あっても部屋の奥にしまいこまれ、洋服も使い捨ての時代になり、たくさんの物に囲まれて生活している。そんな中、私たちの周りには解決すべき課題が山積している。家庭科では家庭生活を中心とする人間の生活を、健康で文化的に営むことのできる能力や、生活課題を解決し、生活を創造することのできる能力の育成を目指している。児童生徒の発達に応じて、家庭科で育てる資質や能力の育成を、小中高等学校の家庭科の目標とし、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会とのかわりについて理解させるとともに、生活に必要な知識と技術を習得させ、男女が協力して家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てることが、家庭科教育の大きな役割であると考えられる。3)

2、家庭科教育の変遷

家庭科教育は、明治期の家事・裁縫教育から始まり、さまざまな歴史の変遷を経て現在に至っている。女子のための中等教育は、明治28年の高等女学校規程の公布により、その教科及び内容が制度として確立し「裁縫」が必修となった。大正期には、洋服やミシンの教材が、わずかながら取り入れられ、昭和に入ると、家事裁縫教育も「芸能科家事」・「芸能科裁縫」となり、戦時体制を乗り切るための教科として国民生活の充実、婦徳の涵養、家を斉えて、国に報じる精神の涵養などを行う教育を担う教科となった。昭和18年には中学校令高等女学校規程の公布により、裁縫科と家事科が統合されて「家政科」となった。このうち家政・育児・保健の3科目が従来の家事的内容で良妻賢母育成の教育であり、被服の指導は4年制高等女学校で、週4時間実施されている。

昭和21年「日本国憲法」が公布され続いて、昭和22年3月「教育基本法」「学校教育法」が公布された。そして、小・中・高等学校を通した家庭科に対する目標として総目標が示され、戦後の「新憲法」「新民法」の考え方に立って、両性が協力して作り上げる民主的

な家庭の創設者の育成が明示された。新しい教育理念に基づく教育目標を掲げ、小・中・高等学校の家庭科がここに誕生したのである。学校体系は6・3・3・4制となり、国民学校は再び「小学校」と改称され、小学校家庭科は5・6学年の男女児童が、週3時間学ぶ教科となる。

1979年（昭和54）国連第34回総会で「女子に対するあらゆる形態の差別撤廃条約」が採択され、1985年（昭和60）日本でもこれを批准した。「男女雇用機会均等法」が成立し、文部省は教育過程の見直しを教育過程審議会に諮問した。家庭を取りまく環境や社会の変化に対応し、男女が協力して家庭生活を築いていくことや、生活に必要な知識と技術を習得させることなどの観点から平成元年に家庭科学習指導要領の改訂がなされた。「情報基礎」「家庭生活」が新設され、男女共学による学習を実施する学校が増加した。1996年（平成8）には、中央教育審議会での「21世紀を展望した我が国の教育の在り方」についての答申がなされ、豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること。そして、自ら学び、自ら考える力を育成すること。ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること。各学校が創意工夫を生かし、特色ある教育、特色ある学校づくりを進めることが示された。そして平成25年には、第8次学習指導要領が施行され、21世紀を切り拓く、心豊かで、たくましい日本人の育成を目指すという観点から、これからの教育の新しい理念が定められた。6)7)8)

次に、小中高等学校の学習内容と到達目標を示す。

3、小・中・高等学校における家庭科の内容構成

★小学校（平成20年版）

- A、家庭生活と家族
 - B、日常の食事と調理の基礎
 - C、快適な衣服と住まい
 - D、身近な消費生活と環境
- （履修時間数）5学年 60時間、6学年 55時間

★中学校（平成20年版）

- A、家族・家庭と子どもの成長
 - B、食生活と自立
 - C、衣生活・住生活と自立
 - D、身近な消費生活と環境
- （履修時間数）第1学年 70時間
第2学年 70時間、第3学年 35時間

★高等学校（平成21年改訂）

（告示）→「家庭基礎」2単位、
「家庭総合」「生活デザイン」4単位から
1科目を全員必修

- 「家庭基礎」内容：
- (1) 人の一生と家族・家庭及び福祉
 - (2) 生活の自立及び消費と環境
 - (3) ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動
- 「家庭総合」内容：
- (1) 人の一生と家族・家庭
 - (2) 子どもや高齢者とのかかわりと福祉
 - (3) 生活における経済の計画と消費
 - (4) 生活の科学と環境
 - (5) 生涯の生活設計
 - (6) ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動
- 「生活デザイン」内容：
- (1) 人の一生と家族・家庭及び福祉
 - (2) 消費や環境に配慮したライフスタイルの確立
 - (3) 食生活の設計と創造
 - (4) 衣生活の設計と創造
 - (5) 住生活の設計と創造
 - (6) ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動

4、小・中・高等学校における家庭科の目標

平成20年、家庭科学習指導要領の改訂がなされ、平成20年（2008）告示、23年度（4月1日から実施）

★小学校「家庭科」の目標

衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるとともに、家庭生活を大切にする心情をはぐくみ、家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる。

★中学校「技術・家庭科」の目標

生活に必要な基礎的な知識と技術の習得を通して生活と技術とのかかわりについて理解を深め、進んで生活を工夫し、創造する能力と実践的な態度を育てる。

（技術分野）実践的・体験的な学習活動を通してものづくりやエネルギー利用及びコンピューター活用等に関する基礎的な知識と技術を習得するとともに、技術が果たす役割について理解を深め、それらを適切に活用する能力と態度を育てる。

(家庭分野) 実践的・体験的な学習活動を通して、生活の自立に必要な衣食住に関する基礎的な知識と技術を習得するとともに、家庭の機能について理解を深め、課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てる。

★高等学校の目標 (平成 21.3 告示)

人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的にとらえ、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会とのかわりについて理解させるとともに、生活に必要な知識と技術を習得させ、男女が協力して、主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる。

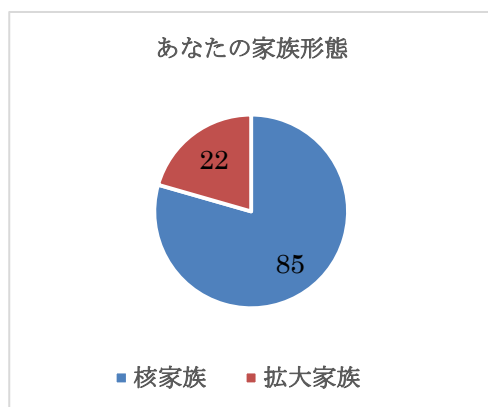
5、アンケート調査結果

初等・中等・高等教育における家庭科の学習内容や到達目標をもとに学習プログラムや教材の精選が重要となることから、どんな教材を提供すれば良いのか、学生の実態を調査し、製作活動の在り方を検討するために調査紙を配布し参考資料とした。これまでの家庭科教育での実習内容を調査したところ、学校によって実習内容は多様で、中・高家庭科の履修時間数の削減から、被服製作では簡単な小物作りしか出来ないという現実があり、またある学校では家庭科を履修せず、全くミシンを使ったこともない学生もいた。22) そこで、家族構成や住生活、食生活の実態について調査し、家族との共食頻度や団らんの時間など、どの位家族が揃って食事をしているのか、食卓での雰囲気作りに関する質問など検証しまとめてみた。

A. 家族構成の調査 (n = 107)

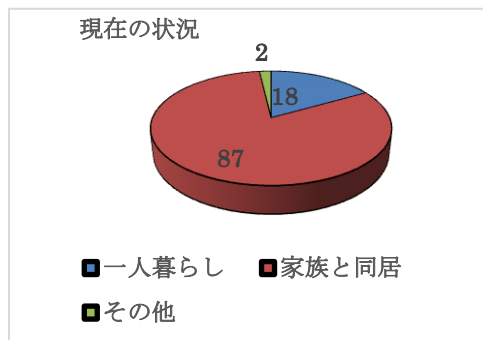
①あなたの家族形態を教えてください。

- 1. 核家族 85名
- 2. 拡大家族 22名
- 3. 単独世帯 0
- 4. その他 0



②現在の状況を教えてください。

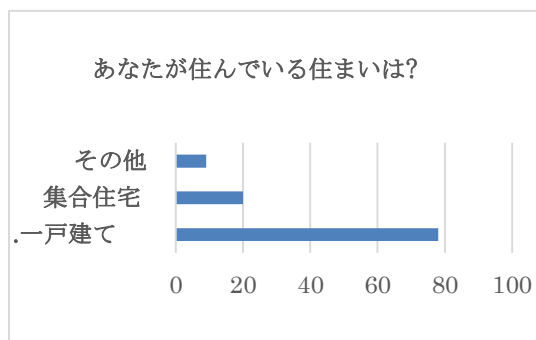
- 1. 一人暮らし 18名
- 2. 家族と同居 87名
- 3. その他 2名



B. 住生活に関する調査

①あなたが住んでいる住まいは次のどれですか。

- 1. 一戸建て 78名
- 2. 集合住宅 20名
- 3. 学生寮 0
- 4. その他 9名

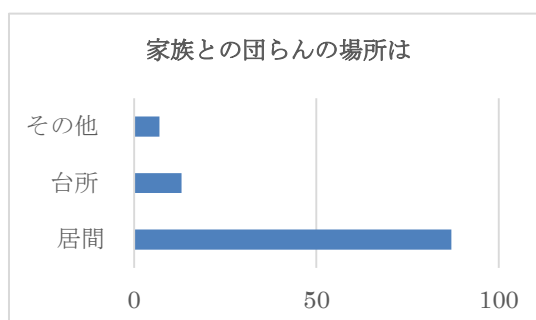
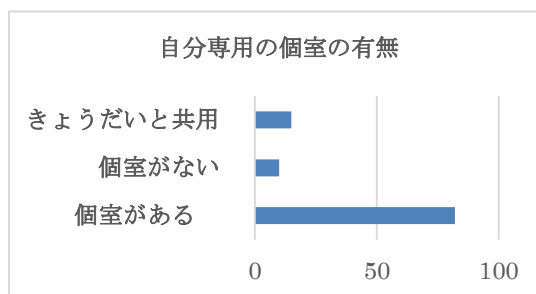


②自分専用の個室の有無について教えてください。

- 1. 個室がある 82名
- 2. 個室がない 10名
- 3. きょうだいと共用 15名
- 4. その他 0

③家族との団らんの場所は主にどこですか。

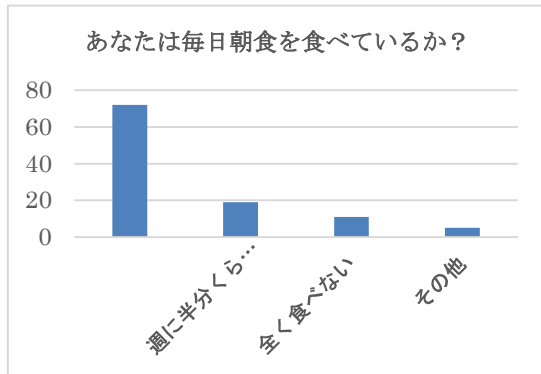
- 1. 居間 87名
- 2. 台所 13名
- 3. その他 7名



C. 学生の食生活調査

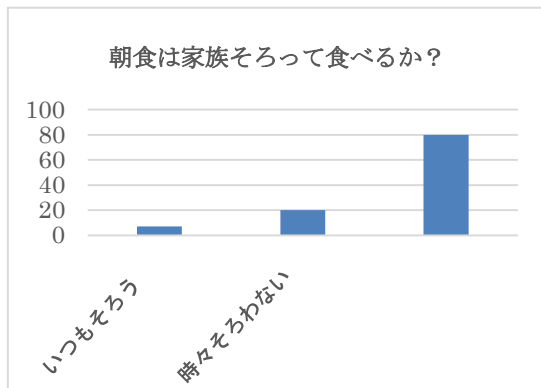
①あなたは毎日朝食を食べていますか？

1. ほぼ毎日食べている。 72名
2. 週に半分くらいは食べる。 19名
3. 全く食べない。 11名
4. その他 5名



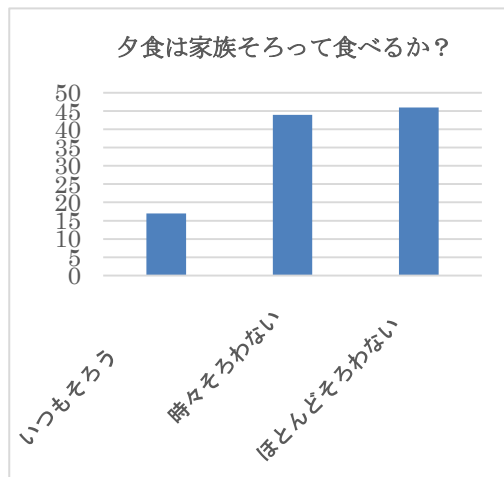
②朝食は家族そろって食べますか？

1. いつもそろう 7名
2. 時々そろわない 20名
3. ほとんどそろわない 80名



③夕食は家族そろって食べますか？

1. いつもそろう 17名
2. 時々そろわない 44名
3. ほとんどそろわない 46名



(まとめ) 価値観やライフスタイルが多様化する今日、家族形態はさまざまである。アンケート結果からも、核家族が増加し、高齢者の一人暮らし世帯や若者の単独世帯も増え、家族関係も希薄化している。学生の食に関するアンケートでは、約8割が朝食を食べているが、ほとんど家族そろうことはないようである。しかし、夕食は半数が家族とともに食べている。会話のほぐす楽しい食事にするためにも、食卓での雰囲気づくりは大きな要素となる。また家族との団らんの場所は約9割の学生が居間と答えていることから、住空間が楽しい食卓作りに与える影響は大きいと考える。

内閣府は、「第2次食育推進計画において」朝食または夕食を、家族と一緒に食べる「共食頻度」の増加を掲げている。家族との共食頻度が高い小・中学生は精神的健康状態が良好であり、成人においても「共食頻度」が増すほど、ストレスが軽減し、情緒的サポートが高くなったという報告が、赤利らによってなされている。18)

家族との絆が問われている今日、家族とともに対話をしながら食事を楽しむ、そんな団らんのある食卓が必要なのではないだろうか。その為の家庭科における教材の開発や学習プログラムの作成は重要であり、指導者の役割は大きいものがあると考えられる。

6. 家庭科教育法における製作活動の取り組み

★実践例

これまで長年、高等学校の家庭科教育に携わってきたが、家庭科が男女共修になってから男子も被服実習を履修、4単位履修のある高等学校ではパンツの製作に取り組み、男子生徒もミシンを器用に使い、楽しく製作に励んでいた。女子高の保育科の家庭総合の授業では被服製作として、1枚の布からエプロン本体とポケット、巾着袋を作成した。それぞれ世界で1つだけの自分のエプロンをつけ、調理実習に臨んだ。残念ながら家庭基礎の2単位では時間がなく、出来上がったエプロンに簡単なボタンつけやポケットつけ、すそのまつり縫いなどしかできず、最近では、簡単な刺し子エプロンや、コースターなどミシンをあまり使わない学校も増えているようだ。



★小学校家庭科での被服製作例

小学5年生	小学6年生
小物（ネームプレート）	さまざまな小物類
ぞうきん	マガジンラック
ランチョンマット	袋の製作
ウォールポケット	カバー類
エプロン など	クッション など

小学校学習指導要領の家庭科の学習内容では「C、快適な衣服と住まい」の(3)生活に役立つ物の製作について‘布を用いて製作する物’を考え、形などを工夫し、製作計画を立てること。手縫いやミシンを用いた直線縫いにより目的に応じた縫い方を考えて製作し、活用できること。また製作に必要な用具の安全な取り扱いが出来ること、とある。「初等教科教育法家庭」の授業では、アンケート調査結果や上記の内容を検討し、3回生で‘ランチョンマット’を、4回生では‘弁当袋’を教材を選び、製作に取り組んだ。

‘ランチョンマット’作りでは、さまざまな色彩の生地を準備し、表裏リバーシブルになるように、生地の色は自由に選択させた。また、独自の創意工夫をこらした図案を考え、チャコペーパーで図案を移し、そこに刺繍を施してから中表にしてミシンで周りを縫い、裏返して、最後まつり縫いをして仕上げさせた。総じて‘まつり縫い’は苦手なようで四苦八苦して仕上げていたのが印象的であった。

被服製作では基礎的・基本的な知識及び技能の定着を図るだけでなく、製作する喜びやグループで協力して作業することの大切さに気付くとともに、製作への自信と日常生活に活用しようとする意欲や態度を育てることにあり、最後の感想には達成感があったという喜びの声と、食卓に手作りのランチョンマットを敷く



ことで家族との話題作りが出来、食事の時間が団らんのある楽しいものになったという喜びの声が多く聞かれた。



表1、～色と食欲の関係～ 東工大より引用

「色と食欲の関係」を調査した東工大の研究を紹介すると、上表1にあるように「どの色のランチョンマットに置いたカレーライスが一番美味しそうに見えるか？」という問いに対して、赤やオレンジと答えた人が大多数であったと報告している。(16)

今回の実習で、一番人気の高かった生地の色が赤や橙などの暖色系で、やはり食欲を増進させる効果があり、逆に黒や青などの寒色系は、食欲を減退させる色であることがわかり興味深かった。学生も色彩が食欲に及ぼす影響を知り、その日の気分でマットの色を変えられるという声もあった。感想にも、生地の色選びから、図案作りと楽しく製作に取り組めたようで、完成させた達成感があり、満足度は高かったようである。

家族の大切さが見直されている今日、対話が増え、コミュニケーションを深めていくためにも、季節に応じてテーブルクロスを替えたり、ランチョンマットを敷く、カトラリー・食器・ナプキン・飾り花・音楽など食卓を楽しく演出するアイテムはさまざまあるが、今回の被服製作でのランチョンマット作りは、家族との触れ合いを深める意味でも意義深いものであった。

4回生では、環境問題の視点から教材を考え、不要になった‘ハンカチ’を利用して「楽しい小物作り」をテーマに‘弁当袋の製作’に取り組んだ。3回生での経験が功を奏し、生き活きと意欲的に頑張っていた。時間の関係もあり、簡単な小物作りであったが、ひもの通し方が難しかったらしく悪戦苦闘していた。それも良い経験になり、ハンカチの色や模様の違いでそれぞれ違ったイメージの袋が完成し、可愛らしい作品の出来上がりとなり、この教材も満足度の高いものとなった。色々と応用力を試せる教材でもある。





★中・高等学校家庭科での被服製作例

中学校	高等学校
エプロン・スカート	ワンピース
モップ・布染め	エプロン・浴衣
ランチョンマット	袋の製作・刺しゅう
ナップザック	布の絵本・編み物
コースター など	クッション など

中学校の学習指導要領では、C、衣生活・住生活と自立の分野の(3)のア、布を用いた物の製作を通して生活を豊かにするための工夫が出来ること。高等学校では、生活デザインの(4)衣生活の設計と創造、ウの(イ)に、被服の製作は、布で体を包む被服の構成を理解させるとともに、被服を製作するための基礎的・基本的な縫製技術を習得させる、としている。中・高家庭科教育法では調理実習や被服実習も取り入れ、まず小中高での家庭科の学習内容を調査し教材の精選をした。短時間で出来る簡単な題材をテーマに、学習指導案作りから始めた。

食領域ではB、食生活と自立の分野で(3)のア、基礎的な日常食が出来ることとある。そこで2回生では‘お弁当作り’を3回生では‘楽しいお菓子作り’をテーマとし、調理実習を実践した。各グループで題材を考え、献立作成から指導方法、作り方の手順、用具の準備、安全確認など、話し合いを進めながら実習に臨んだ。食材の調達や費用など各自分担しながら、それぞれのグループで調理し、弁当箱は各自準備したものにそれぞれに盛り付け、出来上がったものを試食、評価しあった。実習後には栄養価計算をし、感想を書いてもらったが、限られた時間内で作る大変さ、母親はこんな大変なお弁当作りを毎日しているのかと母親への感謝の声も聞かれた。総じて調理実習が実践できた喜びの声が多かった。



被服実習では‘基礎縫いの要点がわかる’をテーマに、手縫いの基礎である並縫い・半返し縫い・まつり縫い・ボタンつけ・玉止め・玉結び等を実践し、またミシン縫いでは、直線縫い・曲線縫い・角・端ミシン・ボビンの巻き方等限られた時間で、ミシンの基本の使い方を復習した。家庭においても、被服製作をする機会がほとんどなく「ほころびたら捨てる」「ボタンがとれてもつけられない」「家にミシンがない」等々、小・中高等学校で、ほとんど何もしてこなかった学生にとっては、針・糸・はさみ・ミシン・アイロンを使用することに対する不安の声もあったが、久しぶりの被服実習は楽しかったという声が聞かれた。ただ家庭科室ではミシンの台数が限られており、1人に1台あればもっとスムーズに製作できるのに、という設備への不満の声も聞かれ、今後の検討課題となった。

さまざまな学科の学生がいる中で、被服製作をする機会に恵まれない学生に関しては、完成した時の達成感が大きく、苦手なものに対する意識を払拭し、経験を積むことで技能の定着を図ることは、意義深いことであり、被服製作は学生のより細かな個性をひき出すことが出来る教材の一つであると考え。

★模擬授業の実践

有用性の高い学習方法として模擬授業があり、家庭科教育法では実践的指導力を養う手段として取り入れている。学習内容の各領域で実習を行う際、指導上必要な指導案を作り、模擬授業を各グループで分担を決め、発表し相互評価する。模擬授業を取り入れた授業実践の効果や相互評価を取り入れた模擬授業の有効性などは、先行研究で指摘されており(17)、その多くは教員養成系大学において実践されている。授業内容や学習方法、教材・教具の工夫など授業構成員については、指導案でしっかり確認し、板書の仕方や話し方等、教授技術や教師としての態度の改善点に気づき、模擬授業による教育的効果は高いものがあると感じる。





7、おわりに

調理実習や被服製作を通して、手作りの良さや楽しさ、毎日の生活に役立つ物を作り、実生活に生かしていくことは生きる力となる。家庭科教育法の授業におけるさまざまな実習は、限られた時間の中で、学生に満足感を与えられる教材の精選が重要となる。被服製作ではミシンが1人1台あれば良いが、台数が少ないという家庭科室での設備面での問題もあり、また習熟度が学生によってさまざまで、時間内に完成出来なければ補修をして出来上がるまで面倒を見なければならぬ。調理実習のようにその時間内に片づく訳ではなく、進み具合がまちまちで、個別の対応が必要となる。そういう面では、なかなか指導面で大変なことも多い。以前は、ワンピースやスカート、浴衣まで製作してい

たが、最近では簡単な小物作りしか出来ない学校も多く、小・中・高とエプロンしか作ったことがないという学生もいた。家庭科の教師も、削減される時間数の中で、教材の選択に悩んでいるのが現実だ。しかし体験学習から得られる教育的効果は大きいものがあり、学生は自分が作った作品への思い入れは熱く、ランチョンマットも弁当袋も大事に使っているとの感想がほとんどである。

今日、環境問題の視点からも、生活の在り方を見直すことが国民的課題となっており、死蔵品を解決する方法の一つとして、リフォームやリサイクルがあるが、これまでの製作体験や製作技術を活かし、資源の有効活用をするというエコライフの立場からも、物を大切に出来る生活者を育てることは意義深いことである。家庭科教育の果たす役割は大きなものがあり、教員養成課程において、家庭科を指導する人材を育成するためには、さまざまな実践的力を身につける必要がある。その意味からも、学生が主体的にかつ意欲的に参加出来る学習プログラムを作成し、効果的な授業実践を継続していきたいと考えている。

<参考文献>

- 1) 文部科学省：小学校学習指導要領解説家庭編（平成20年8月告示）
- 2) 文部科学省：中学校学習指導要領解説家庭編（平成20年3月告示）
- 3) 文部科学省：高等学校学習指導要領解説家庭編（平成22年5月告示）
- 4) 大本久美子：「教員養成における教科教育の在り方に関する研究―初等家庭科教育法と教科内容論の授業内容の検討―」大阪教育大学紀要 第V部門 第60巻第2号 45～55頁（2012.2）
- 5) 小林京子：被服製作実習の教育的意義
- 6) 池崎喜美恵：「小学校家庭科授業研究」教育出版、（2009）
- 7) 内野紀子、藤原孝子：「新学習指導要領の展開家庭編」明治図書（2009）
- 8) 加地芳子、大塚真理子：「初等家庭科教育法」ミネルヴァ書房（2011）
- 9) 三輪聖子、辻泰子、夫馬佳代子、西村敬子：「家庭科教育における被服領域についての現状と動向」愛知教育大学家政学教室研究紀要 第28号（1997）
- 10) 近藤清華：「小学校教員養成科目としての家庭科の現状と課題―短期大学のシラバス分析から―」（2013年9月27日）
- 11) 赤崎真弓：「被服製作基礎技能に対する学生の自己評価と被服実習授業の検討」長崎大学教育学部教科教育学研究報告 第26号 111-122（1996）
- 12) 照林悠、石川孝重：「家庭科教育の課題と今後のあり方に関する研究」日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科 第17号
- 13) 川合みちる、谷口明子、平嶋憲子、中嶋たや、菱田道代、河崎智恵、鈴木洋子他：「小中高等学校の系統性に配慮した被服製作題材の検討」奈良教育大学
- 14) 鈴木洋子：「これからの中学校家庭科における被服製作実習・調理実習について―家庭科教師の意識―」日本家庭科教育学会誌 第32巻第3号 9-15（1989）
- 15) 多々納道子、竹吉昭人：「家庭科教員の指導実態からみた製作活動の教育的意義」島根大学教育学部紀要（教育科学）第39巻 19-24頁（H18.2）
- 16) 図る「色と食欲の関係」；東京工大

- 1 7) 永田晴子:「家庭科教員養成における模擬授業実践による相互評価の活用--私立大学における事例をもとに-」大妻女子大学家政学部 日本家庭科教育学会 56(0). 34. (2013)
- 1 8) 赤利吉弘, 小林知未, 小林千鶴, 植杉優一, 内藤彦彦:「成人における年代別・性別の共食頻度と生活習慣社会参加および精神的健康状態との関連」栄養学雑誌 Vol. 73 No. 6 243-252 (2015)
- 1 9) 高木幸子:「家庭科教員養成における模擬授業実践を取り入れた教育法プログラムの検討」
- 2 0) 大井加壽子:「家庭科教育法Ⅱ」における授業内容の改善, 四天王寺大学紀要第 58 号 (2014. 9)
- 2 1) 西岡敦子, 村田浩子:「家庭科教育における被服教育のあり方」 国際研究論議 20(2) 71-85, 2007
- 2 2) 西田順子:「保育科における家庭科教育のあり方について」 大阪樟蔭女子大学 子ども研究 Vol. 6 26-32